研究区分	教員特別研究推進　教育推進

研　究 テーマ	看護学生の高齢者イメージと高齢観の変化をとらえた老年看護学教育の検討				
研究組織	代　表　者	所属・職名	看護学部・准教授	氏名	成瀬　早苗
	研究分担者	所属・職名	看護学部・特任教授	氏名	深江　久代
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	飯塚　真樹
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	宮澤　典子
	発　表　者	所属・職名	看護学部・准教授	氏名	成瀬　早苗

講演題目

看護学生の認知症高齢者に対する理解とイメージの実態

研究の目的、成果及び今後の展望

【目的】老年看護では、ポジティブな高齢者観を持ち、高齢者の『もてる力』を見出すことを重要視している。認知症高齢者の看護には、認知症の症状、患者と看護師の関わり、認知症高齢者への看護に関連する困難があり（千田ら, 2014)、看護学生は、認知症高齢者の関わりに戸惑いや困る気持ちを抱く（高野ら, 2016）ことが明らかになっている。これは、看護実習において、さらに将来看護師として直面する問題であり、リアリティショックを招くことも考えられる。本研究は、学生の認知症高齢者理解とイメージの実態を明らかにすることで、学生の実態に合わせた柔軟な教育を目指し、現教育の評価と今後の講義や演習、実習の方法や内容に対する示唆を得ることを目的とした。

【方法】本学看護学部 2 年生を対象に、講義後にアンケートを実施した。調査内容は、認知症高齢者の人の関わり、認知症の関心、家族構成, 認知症の人との同居経験、認知症に関する学習の情報源、認知症の病態・治療の理解 21 項目、認知症ケアの具体的ケア方法の理解 40 項目、実践したい認知症ケア 40 項目を調査した。さらに、認知症高齢者に対するイメージは、自由記述とした。

【結果】統計的分析は、IBM SPSS Base System 27.0J、質的データは、テキストマイニング（Text Mining Studio Ver. 6.4.0　NTT データ数理システム）を用いた。Kruskal-Wallis 検定により、認知症の病態・治療の理解 3 項目、認知症ケアの具体的ケア方法の理解の 2 項目、実践したい認知症ケアの 19 項目は、認知症の関心に有意な差があった。認知症ケアの具体的ケア方法の理解の 16 項目は、認知症に関する学習の情報源の映画やドラマに有意な差があった。自由記述をみると「怖い、難しい、かわいそう」などのネガティブなイメージが 99.8%であった。認知症高齢者が家族にいる場合は、「愛情やその人にとって大切なものは変わらない、寄り添いたい」や「家族の負担が大きい」などの記述があった。

【今後の展望】現在は、核家族化や新型コロナウイルス感染症のため、高齢者、認知症高齢者との関わりが減少しているため、理解しがたいことやネガティブなイメージをもちやすい。今回、認知症高齢者の理解は、関心をもつことが必要であることがわかった。認知症の理解は、紙面上だけでは難しいため、イメージしやすく関心がもてるような動画や VR などを利用する、複雑な症状の対処方法、高齢者の強みやもてる力を引き出せるようなポジティブなケア方法を教授し、ポジティブな高齢者観をもつように導くことが必要である。今回は、講義終了時の実態を明らかにしたのみであるため、今後は講義前と実習後の比較し、認知症の理解やイメージの変化を明らかにしていくことで、認知症教育の向上を図ることが必要である。